

## 同情

私は今から「悩める女性の胸に」と題してお話し申します。むつかしい学問をしていなさる学者にお話しするのもありません。得意に生きていなさる御嬢に捧げるのでもありません。

私は人生という行列の中から、華やかであるべき若い処女や奥様の中に、涙にみちた暗い顔の方をあまりにも多く発見いたします。

看護婦会で働いている方々、紡績工場で働いている方々、奥村で働いている乙女たち、会社やお役所で働いている人たち、下女をしている姉妹、多くの子供をつれて夫に死に別れた不幸な母親、不良な夫や頑固な姑しゅうとめを持つ妻、それがあまりにも私の心を暗くします。

私は昨日もその訴えを聞きました。今日もまた数人の方々の訪問を受けました。私の心はこうした世界に泣く皆様にとらえられてしまいました。今からお話しいたします。

泣いていないで顔をあげなさい。

「先生わたしの心はなぜこんなにも暗いのでしょうか。」今まで一度も会ったことのないあなたが恥すかしそうな中からも、やっとこれだけ口に出してうつむきます。何かたいへんな事情があるにちがいない。

「あなたには御両親がありますか。」

「父はごさいますが母がごさいません。それに家が貧困なので、こうして働いています。」

曇ったその目、あおぎめたその顔、笑いの世界から遠ざかった、あなたの数年間の淋しい、苦しい人生の旅の疲れは、見えすぎるほど見えてきます。

晩春の目ざめるような若葉の間を、折り目さえつかぬような絹物を着流し、今流行の薄物のシヨールを肩に、お姫様のように美しく装った同じ年ごろの処女むすめが、友だちといっしょに公園を散歩しているのをよそに見て、紡績工場に通ってゆくあなたに悲哀がなくてすまぬくらいは知っています。

友のだけかれは女学校を出て、教育もあるりっぱな男子と結婚しているのに、あなたは弟の学資を出しつつ派遣看護婦として過ごす幾年、二十もいつしかすぎて、二十五歳という老嬢になっています。淋しい、暗い、それも無理はない。

私の所には男も女も悩む者しか来てくれない。いったいそれはどうしたのか。でも私も淋しい人間であり、悩み多い人間です。あなたを助けるの救うのということとは、柄にもないことなのです。だけでも、皆様の訴えは、自然に、聞いていた私に何かを言わせるのです。その言った一言葉でも、もしあなたの胸に何かを残したら、私の苦しさも助かります。